

ヴォイドの関係ーデ・ステイル建築再考：その特徴的空間構成の展開 - Relation of Void -Projects of the Development from Space Composition of De Stijl Architecture-

筑波大学大学院 修士課程 芸術研究科 デザイン専攻 建築デザイン分野
中村 卓
NAKAMURA, Suguru

背景と目的

英訳では the style を意味する「デ・ステイル」(1917 ~ 1932) はオランダのデザインの流れの中で世界的にも最もよく知られた運動であり、水平、垂直の平面分割と三原色の色彩のデ・ステイルのデザインは今日においてもよく見かけられ、この抽象的手法がデザインの一つの規範として成り立っていることを窺い知ることができる。デ・ステイルは、オランダが第一次世界大戦(1914 ~ 1918)において中立を保ったため、フランス、ドイツ、イギリスなどの近隣諸国が戦時体制になっている中で、文化的に孤立した状態となった。こうした特殊な時代環境の中、雑誌「デ・ステイル」が建築、絵画など多方面の芸術に精通していたテオ・ファン・ドゥースブルフを中心とした同名のグループにより創刊された。その結果、建築家、画家、彫刻家、更には詩人といった多彩な顔ぶれが集まる結果となったが、ドゥースブルフの妥協を許さない厳格かつ極端な抽象化の理念に追われグループを去る者も多く、彼の享年を期に翌年の1932年をもってデ・ステイルは終焉を迎えることになる。15年間という期間のみならず、常にメンバーが入れ替わるという可変的な体質をもったこと、新造形主義の提唱者ドゥースブルフの指導により、画家と建築家が協同で計画を進めたことなど、実際に建築を成立させる上でそれぞれが困難な要因になったことは想像に難くない。その為多くの建築家が参加したにも関わらず、スタンドグラスやタイルといった平面的なデザインに留まることが多く、唯一建築的到達点と目されているのは2000年に世界遺産に登録されたG・Th・リートフェルトによるシュレーダー邸である。以上の背景から、本制作の目的はデ・ステイルの唱えた新造形主義を改めて見直し、シュレーダー邸とは異なる解を示唆することで、デ・ステイルの建築における新たな考え方を提示し、その表現手法の枠組みを広げることを目的としている。

事例1 多彩な分野を示す作品



ピート・モンドリアン
コンポジション(1921) ジョージ・ファントンズル
構成 y-a2+bx+18 (1930) ヘリット・トーマス・リートフェルト
レッド/ブルー・チェア(1918)

事例2 デ・ステイルによる建築的取り組み

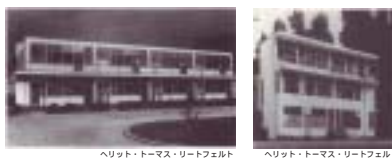


テオ・ファン・ドゥースブルフ
床タイルのデザイン(1918) テオ・ファン・ドゥースブルフ
メゾン・パティキュリエール
(1923) ヘリット・トーマス・リートフェルト
シュレーダー邸(1924)

設計の方針

レッド・ブルー・チェアを事例としたとき、デ・ステイルの文脈より捉えられるその解釈は、個々の部材は純粋で効果的なコンポジションと彩色によって「面」や「線分」といった形態の概念レベルへ引き戻されている。これは、新造形主義において欠かすことのできない理念としてエレメンタリズム(要素主義)と称されるもので、切り取られた一瞬としての浮遊感をその印象として与える効果を持つ。それはまさに純粋な形態要素に還元した作業の結果であり、建築に応用させたものがシュレーダー邸と読み解くことが可能である。しかし同時に設計者リートフェルトが元来家具職人であったことから鑑みると、からくりを散りばめた大きな家具としての性格が強いため、可動間仕切りによる用途に対するフレキシブルな提案とその作り込みへの評価が関連文献の随所に見受けられる。レッド・ブルー・チェアは制作当初は無彩色であり、後にデ・ステイルメンバーを通して参加した後に現在の形で発表された。更に処女作であったシュレーダー邸以降の建築作品ではそれとは大きく異なる様相を呈しているなどの事情から、リートフェルト自身新造形主義への到達を目指していたか否かは慎重な判断が必要とされることである。デ・ステイルの唱えるエレメンタリズムと、リートフェルト特有の家具製作のための手法が重なった結果としてのシュレーダー邸と仮定すれば、本計画では「エレメンタリズムを用いた空間構成」という建築的問題、本質的空間構成の問題に引き寄せ提案の方針とした。

事例3 リートフェルトによる後の建築作品



ヘリット・トーマス・リートフェルト
4 邸(1924)からなる構成図(1931-1932) ヘリット・トーマス・リートフェルト
4 邸(1924)からなる構成図(1931-1932)

特徴的構成と分類と制作の枠組み

エレメンタリズムを端的に表現したレッド・ブルー・チェアの構成の特徴は、不整合な接合によるものである。デ・ステイルにおける立体作品ではこの接合が多用されていることは明らかであり、本計画において扱われる主たる手法として位置づける。その立体作品において面・線による実体を持つヴォリュームによる空間構成が主だったことに対し、ヴォイドなヴォリュームという項目を新たに設けることにより、空間に比重を置いた構成を本制作の軸として設定した。

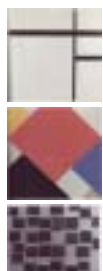
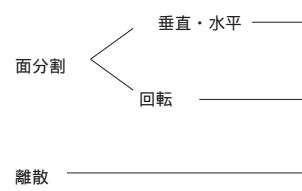
加えて絵画を中心とした平面作品にみる代表的な構成は、直交線による面の分割と独立した矩形の自由な配置とに大きく二分され、前者ではさらにフレームに対して直交・フレームに対して一定の角度を設けるという三種に分類することが可能である。

以上の読み取りから、特にヴォイドに比重を置いた特徴的接合を軸に平面作品にて分類される構成を建築の構成と重ねて展開していく。

構成の分類：立体

		ヴォリューム(構成要素)	ヴォイド		
平面的	整合			平面的	整合
	不整合				不整合
	不整合				不整合
立体的	不整合			立体的	不整合
	不整合				不整合
	不整合				不整合

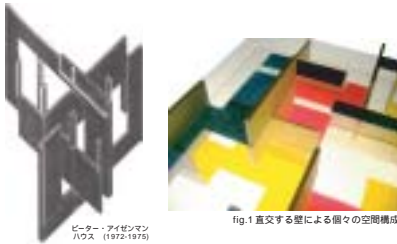
構成の分類：平面



ヴォリュームとヴォイド

ヴォリュームによる特徴的構成

ニューヨーク・ファイブの建築家として知られるピーター・アイゼンマンによるプロジェクト「ハウス6」では、デ・スタイルに見られる特徴的手法を用いた空間の構成を試みている。2枚の不整合に噛み合された壁を構成の軸とし、その周囲に空間を展開している。この事例からも伺える構成的な性格として、「外向的」な性格を持ち合わせることが把握できる。これを踏まえ、スタディではこの2枚の壁が広がりを持った空間として展開していくことを確認した。



ピーター・アイゼンマン
ハウス (1972-1975)

fig.1 直交する壁による個々の空間構成



fig.2 集合化によって外向きに展開する空間構成

ヴォイドによる特徴的構成

リニアなヴォイドを一つの単位空間として、東西軸、南北軸にそれぞれ4つのヴォイドをマスなヴォリュームに貫入させるという設定にてスタディを行った。この結果、下図のA-a、B-c、dといったように、空間が異なった場所で連結・独立し、箇所によっては動線、採光、あるいは腰壁としての高さを持ち空間を緩く繋いだりと、その組み方によって環境的、計画的と実に多様な建築の役割を交換する。

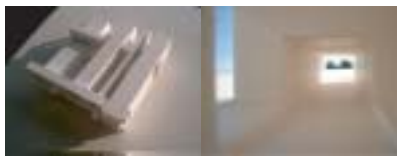
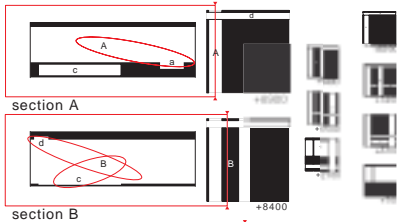


fig.3 直交による構成

fig.4 空間内部



section A

section B

考察

ヴォリュームでの特徴的構成は外向きな展開を見せるのに対し、ヴォイドの構成では内部へ向かう内向きな空間の展開を見ることが確認できた。

垂直・水平の構成による住宅のスタディヴォイドを構成していく際に、水平方向・高さ方向共に水平・垂直にヴォイドを穿ち、住宅を構成していくスタディを行った。このスタディでは柱・梁・壁など建築の要素が一緒たになり構造として成立している他、家具など室の機能を示すアイコンの配置によってヴォイドの構成がより明快になる。



fig.5 住宅スタディ全景



fig.6 家具による行為の表出

従って家具の配置、つまり表出する行為を手掛かりにヴォイドの構成による住宅の設計が本制作の一つのガイドとなる。

シュレーダー邸への展開

デ・スタイルの代表的建築であるシュレーダー邸が「外向的」な手法を用いて構成されていることと、本制作で軸としている「内向的」な手法によって構成することを比較検討する上での確かな対象であると考えたため、同一の敷地及び建築的なスケールでケーススタディとしての作品制作を試みる。

敷地

オランダグトレヒトの郊外の角地に位置する。南北軸に対して、ほぼ30度時計回りに角度を振った比較的にリニアな矩形の敷地形状で、北西面は隣接する礎石造建築の端部となっている。



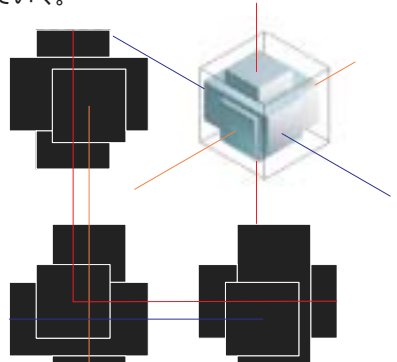
site s=1:800

作品3題

シュレーダー邸の敷地を想定したケーススタディとして、作品3題を提案する。これらはデ・スタイルに見られる言語それぞれモチーフとして着目し、ヴォイド相互の関係及びヴォリューム配置とヴォイドの関係からその特徴的な効果を導いた。下図はその関係を示す3面図である。

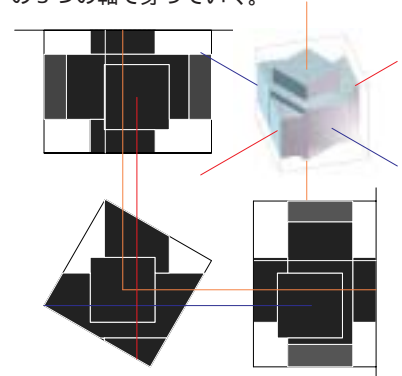
ヴォイドの関係1-家具の配置-

ヴォリュームに対して水平・垂直にヴォイドをそれぞれx・y・zの3つの軸で穿っていく。



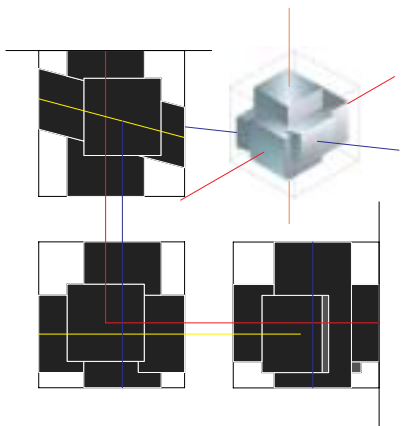
ヴォイドの関係2-色彩の配列-

ヴォリュームに対して水平方向のみに角度を振り、ヴォイドをそれぞれx・y・zの3つの軸で穿っていく。



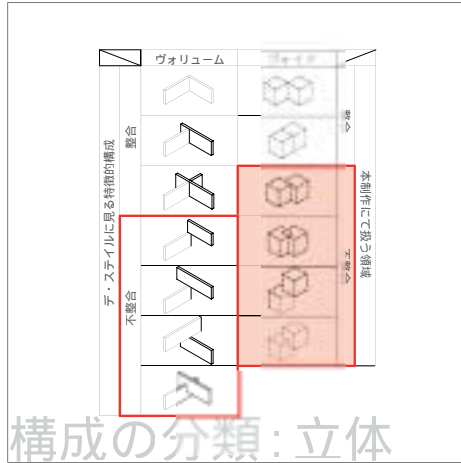
ヴォイドの関係3-平面の構成-

ヴォリュームに対して、水平方向のヴォイドの一方を垂直方向に傾斜させる。



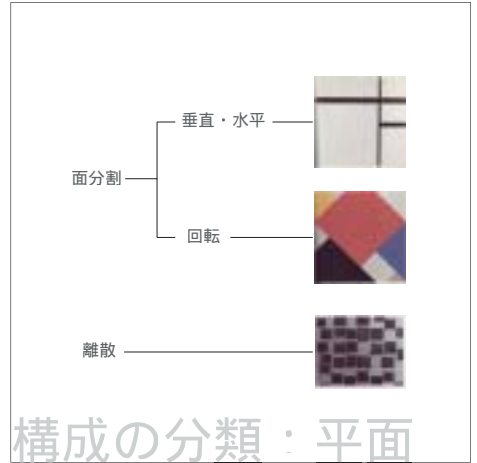
特徴的構成と制作の枠組み

線・面など物質による構成を「ヴォリューム」による構成、と定義し、新たに空気の塊としての「VOID」による構成を付け加え空間構成の軸とする。デ・スタイルの立体作品においてはヴォリュームの不整合な構成が特化して見受けられる。この特徴的とされる構成法を、定義したVOIDという考え方に当て嵌める事で、それまでなかった建築的・空間的問題として展開させる。



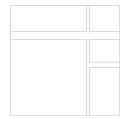
構成の分類：立体

デ・スタイルの平面作品は、主に面分割によるコンポジション・独立した矩形の自由な配置・離散に大別される。さらに面分割では画面に対して水平・垂直、及び画面に対して回転と分類される。これら平面に見られる構成パターンを「構成の分類：立体」にて軸としたVOIDの構成と重ね、設計を展開していく。

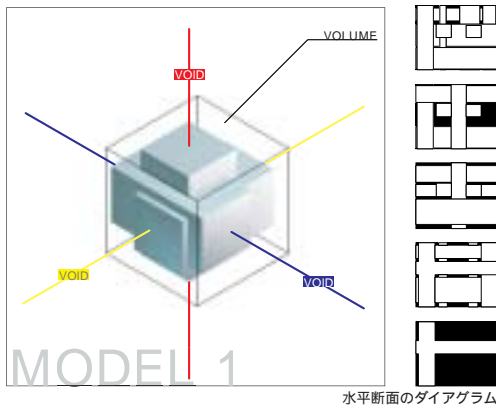


構成の分類：平面

作品 no.1 ヴォイドの関係 - 家具の配置 -

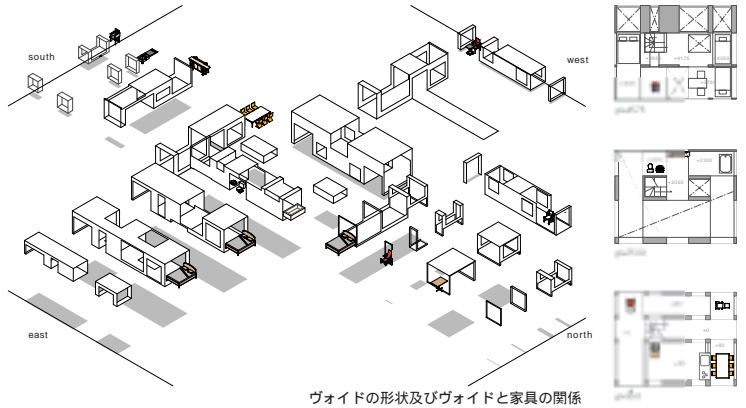


マッシュな塊として想定したヴォリュームに対し、水平・垂直にVOIDをそれぞれx・y・zの3つの軸で穿つ。この時、デ・スタイルによる家具の配置をひとつの手掛かりとしてVOIDを構成する。



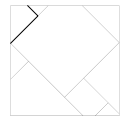
MODEL 1

水平断面のダイアグラム

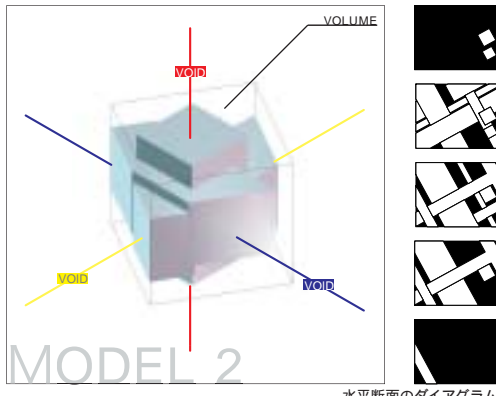


VOIDの形状及びVOIDと家具の関係

作品 no.2 ヴォイドの関係 - 色彩の配列 -

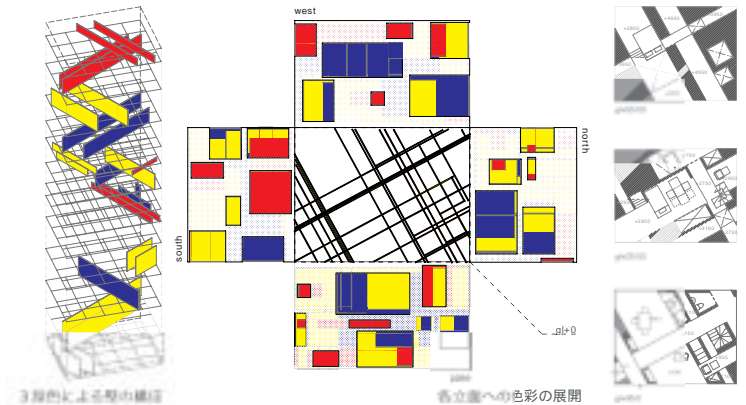


ヴォリュームに対して水平方向のみに角度を振り、VOIDをそれぞれx・y・zの3つの軸で穿つ。この時、その内壁上にデ・スタイルの言語のひとつである色彩を施す。



MODEL 2

水平断面のダイアグラム



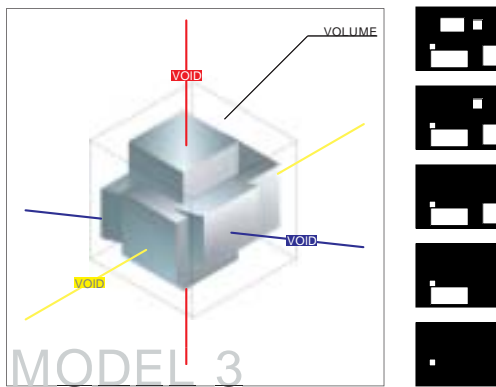
3原色による壁の構成

各立面への色彩の展開

作品 no.3 ヴォイドの関係 - 平面の構成 -

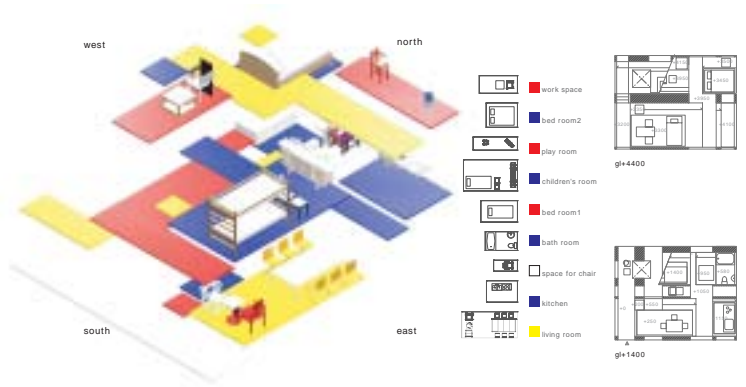


ヴォリュームに対して、水平方向のVOIDの一方を垂直方向に傾斜させる。傾斜したVOIDを水平のVOIDが削り取ることで、利用可能な水平面が表れる。



MODEL 3

水平断面のダイアグラム



機能と床の関係：アクソメ / 平面

plan 1:600

デ・ステイルに見られなかったヴォイドという考え方。
それをデ・ステイル特有の構成法によって導いたケース・スタディとしてのシュレーダー邸。



作品1：ヴォイドの関係—家具の配置



作品2：ヴォイドの関係—色彩の配列



作品3：ヴォイドの関係—平面の構成



まとめと考察
ヴォイドの水平・垂直の基礎的な構成から始まり、水平方向に角度、及び垂直方向に傾斜という操作を本制作で扱った。作品1はシュレーダー邸を対象としたケーススタディであり、空間を構成するきっかけをインテリアの家具に求めた基礎的な構成である。作品2及び3では、建築のファサードへのアプローチと空間のプランの構成へのアプローチがヴォイドの操作によってなされた事が確認できる。つまり、ヴォイドの操作によって、より建築的な問題意識へと発展させる事が可能

であった。
また、タイトルである「ヴォイドの関係」という名称は、デ・ステイルの彫刻家ジョージ・ファンゲルローによる「ヴォリュームの関係」(1919)に由来させている。ファンゲルローは直感的な構成よりも、数理分析的にその構成を導き出し作品を制作した、デ・ステイルの中でも正確な仕事をする作家として異彩を放っている。ファンゲルローから名称を由来させたのは、ある規則に基づいた構成、つまり「建築という諸々の規則に則った上での必然的

に表れてくる構成」を示している。
本制作において、建築的な問題意識へ展開させたことがデ・ステイルにとっていかなる意義があるのかについては明言はできないが、ドゥースブルフが建築へと昇華させるために用いた「カウンター・コンストラクション」と称されるアクソノメトリック図法と絵画との狭間にある表現手法とは別に、建築へと展開しうる手法を提示したことに本制作の意義があるように思われる。